【大津地方法務局長賞】（中央大会　奨励賞）

新幹線の中で

近江八幡市立安土中学校２年　上野　健晴

夏休みに、母と鹿児島行きの新幹線に乗っていた時のことだ。うとうとしていた僕は、母に起こされた。通路をはさんだ隣の席に、目の見えない男性が座ろうとしていた。一緒に歩いてきた駅員さんは、男性に

「降りる時にまた参ります。」

と声をかけ、去っていった。男性は持っていた紙袋を足元に下ろした。体は大柄だが、隣の人と当たらない小さな動きで手際よく白杖をたたみ、背中と背もたれの間に置いた。その後は姿勢を正したまま、じっと座っていた。僕が男性の行動を見てしまったわけは、目の見えない人が一人で新幹線に乗って移動していることにびっくりしたからだ。もし自分だったら一人で新幹線に乗るのだろうか。想像するだけで心細い。

次の駅に近づいた時、男性の隣に座っていた人が、

「降ります。」

と声をかけた。すると、男性は足元の荷物を自分のひざの上にのせ、さっと足を引いた。動作がきびきびしていて、僕はまた驚いた。だが、隣の人が降りた後も、ずっと足を引いたままの姿勢で固まっていた。母は心配になったようで、

「隣の方は降りられましたよって教えてあげた方がいいかな。」

と僕にささやいた。僕は、この駅で乗車してくる人がいるかもしれないと思い、「まだ声をかけなくてもいいんじゃないの。」と言った。僕の予想に反して、その席には誰も来なかった。新幹線が走り出し、発車を知らせるアナウンスが流れると、男性はさっとひざの上の荷物を足元に下ろした。僕と母は驚いて顔を見合わせた。目は見えないけれど、耳で状況を判断していることに気付いたからだ。余計な心配をした母は恥ずかしそうだった。男性はその後も、姿勢を正して座っていた。

その次の駅で若い女性がやって来た。

「すみません。」

と声をかけたが、男性はぴくりとも動かなかった。女性は不思議そうに男性を見

ながら、先に荷物だなに荷物をのせた。それに気付いた男性は、前のように荷物をひざの上にのせた。女性はあきらかに不機嫌だった。事情を知らずに座ったら、僕も少しは嫌な気持ちになったかもしれない。心配そうに見ていた母は、女性と目が合ったらしい。女性は、ゴーグルのような眼鏡をかけた男性をまじまじと見た後、何か気付いたようだった。

次の駅に近づくアナウンスが流れると、男性は座席に置いていた白杖を手際よく組み立て、立ち上がった。動いている新幹線の通路を、座席の上に付いている取っ手をつかみながら、出口に向かって歩いていった。僕と母は、男性が一人で下車できるのか心配で、窓の外を見ていた。駅に着くとホームに駅員さんが迎えにきていた。駅員さんの肩に手をのせて、エレベーターに乗ろうとする男性の姿を見て、ほっとする自分がいた。

僕は、普段の生活の中で、目の見えない人に接する機会がなかった。そのため、今回白杖を持った男性を見て、初めは、かわいそうな人だな、気の毒な人だなと思ってしまった。母は何かあったら声をかけてあげないといけないかなと、そわそわしていたほどだ。でも僕たちが見ていた男性は、すごい人だった。目が見えない分、耳や手、その他の感覚で状況を判断できる、自立した人だった。一人で新幹線に乗れるように、家族と一緒に何度も練習したのかもしれない。

障害者と聞くと、助けてあげなければならない人だと思いがちだ。でも、よく考えてみると、僕も人に助けられて生きている。例えば、朝起こしてもらったり、ご飯を作ってもらったり、習い事の送り迎えをしてもらったりと、出来ないことを人に頼っている。人は皆、助けられながら生きていると思うので、障害を持っているから特別にというわけではなく、お互いを尊重し合って生きていくことができたらいいなと思った。

今回出会った男性のように自立した人もいる。だから、これから障害を持った人に会うことがあれば、困っているようなら声をかけてあげたい。その勇気が持てる人でありたいと思う。